科／月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	平均
眼科 新來	五	一〇	一二	一四	八	六	四	八
眼科 再來	一七	四〇	四四	一六〇	九三	八〇	六七	七二
眼科 小計	二二	五〇	五六	一七四	一一	八六	七一	七九
總平均 外來 新來								二
總平均 外來 再來								六
總平均 外來 小計								七
總平均 入院	二	七	一二	一二	一二	一二	一二	九

右の表で見ると眼科外來の一日七十九名を最多とし外科の十一名が最少である。然し外來患者の多い眼科の如きは入院患者は極めて少なく此反對に外科の如きに於ては外來患者は少ないが手術等を伴ふが故に單に患者數のみを以て勤勞の度を測定する事は出來ない事になる。他方入院患者の延人員をも計算の中に編入すれば醫員一人に對する一日の患者取扱數は平均四十二名となる。東大附屬醫院內科の一部では醫員一名一日の外來患者取扱を四十五名と限定してある。彼是れ比較して見ると總平均の四十二名は面白い結果を得たものと思考されるのである。勿論科によりては猶醫員の增加をせなければならないと思考した事もないではなかつた。

第八表　外來係の看護婦一名が一日に取扱つた患者數

科／月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	平均
內、小兒科	二三	四五	五二	六〇	五〇	四二	三四	四四
外科	七	一二	一六	一五	一〇	八	六	一一
產婦人科	三	五	一五	一九	一八	一七	一四	一三
耳鼻咽喉科	一四	一四	二四	三二	一九	一五	一四	一九
眼科	二二	二四	四八	六二	五三	四一	三五	四一
總平均	一四	二〇	三一	三八	三〇	二五	二一	二六

外來係の看護婦一名が一日に收扱つた患者數の總平均は二十六名である。これは大した無理もなかつた事と思考される。

第九表　調劑數及一人一日の調劑數(平均)

數／月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	計
調劑數	八、〇五五	一九、四三六	三〇、二三八	三八、四六七	三一、四九二	二八、八二六	一八、五九四	一七五、一三八
平均數	二八	二五	一八〇	一七七	二一〇	一八六	一三七	一五五

日本の諸所に於ける病院の統計を見ても藥劑師一名の調劑數は吾々が得た平均數に近似するものであり、實際に於てこれ位の仕事をやつて居るものと思はれる。

只茲に考へなければならない事は外來患者は大抵午前中に診療を終る樣になつて居るから一人一日の統計としても其繁閑を思考する上に於ては此點を考慮の內に置かなければならない事勿論である。

(八) さきに述べた樣な屋臺を張り其處に勤務する者は既記の醫員、藥劑師看護婦、以外に左記の種類のものがあつたのである。

第十表　傭　人　數

種別＼月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月
守衛	三	三	三	三	三	三	三
小使	五	五	六	六	五	四	四
給仕	四	五	五	五	五	四	四
雜婦	三	三	三	三	三	三	三
火夫	二	二	二	二	二	二	二

是等勤務者に對する人事とこゝに出入する患者及これに關聯する種々の事項其他一切の院務を取扱ふ爲に幾何の事務員を必要としたか其は左表に示す通りであるが實際更に長期に亘りて繼續する樣の場合、事務に練達すれば事務員數は更に減少し得るものと思ふ。

第十一表　事務員數

種別＼月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月
事務長	一	一	一	一	一	一	一
事務員	四	四	四	四	四	四	四

(九) 最後に殘る問題はこれに要したる經費の點である。今年一月以前に於ては委任經理でなかつたが故に手取り早く之に要したる經費を算出する事が出來ない故に昨年十二月に要した費用は七千五百圓と概算したのである。爾後の費用は左表に掲げる通りである。

第十二表　諸　經　費

月／種別	諸給與	需用費	醫療費	計
十二月概算	五、四五〇・一二錢	一、二四九・五二錢	一、六八三・〇〇錢	七、五〇〇・〇〇錢
一月	七、一二八・三一	二、一一六・八九	三、二四二・〇八	八、三八三・四四
二月	七、一九六・三〇	三、四九八・五〇	三、九〇四・三八	一二、四八七・二八
三月	七、六七一・二八	一、七三四・三一	三、三四九・六四	一四、五九九・一八
四月	七、二一六・一一	四〇五・四四	四、〇〇九・七七	一二、七五五・二三
五月	七、七九三・八〇	六一五・二八	二、二五〇・〇五	一一、六三二・一一
六月	四二、四五五・九二	九、六一九・九四	一八、四三九・七二	七八、〇一六・三七
合計				

(十)第十二表に掲げた通り開院以來閉院迄に合計約七萬八千十六圓三十七錢の經費を要したのである。猶これ以外に要したものもあり、又此稿脱稿迄に未拂のものもあらうが大體に於て右の經費を費した譯である。此費用を患者一人當りにすれば幾何となるかは今後病院經營を策する上に於て多少の參考となる事と思ふ。下谷病院に於ける經驗から計算すれば左表の通りになる。

第十三表　諸經費を患者一人當に割當た數

月／種別	外來	入院	平均
十二月	二・三一錢	一一・六三錢	一・九五錢
一月	一・二〇	二・八二	〇・八四
二月	一・〇九	二・九九	〇・八一
三月	二・四六	二・八四	一・三二
四月	一・一三	二・四二	〇・七七
五月	一・一九	二・二四	〇・七八
六月	一・五一	四・一五	一・一一
總平均	一・四〇	三・〇〇	〇・九六

下谷病院に於て費したる經費を患者一人の頭割りにして見れば外來患者のみに割當てれば一人一日當り一圓四十錢となり入院患者のみにすれば一人一日三圓の割となる外來及入院患者の兩方に割當てた總平均は一人一日當り九十六錢となる。

營利的の病院に於ては更に建築資金に關聯した事項も考慮さるべきではあるが茲にこれを除外して單に病院の運轉に必要とした經費から割出して見たに過ぎない。

第四章　臨時信濃町病院

一、創立事務

本院は震災臨時救療の爲め新に急設したる病院の一であつて、之が設立の議決するや、十月末病院長を囑託し、事務長を任命し、十一月醫長、事務員看護婦長等を逐次任用して、諸般の創立事務に從事せしめた。

二、工事

病院は東京市四谷區信濃町慶應義塾醫科大學病院裏に敷地を借り、十二月初旬建築工事に着手し、翌年一月中旬其大部を竣工し、同月末漸く患者を收容し得るに至つた。總建坪九百四十九坪弱あつて病室、診察室、手術室、藥局、事務室、看護婦室、機關室、炊事場、浴場等に分れ、病室は十二床を有する大室二十四、一人收容室二十一あり、之に看護婦室、配膳室、物置等を附屬した。

暖房其他に使用する蒸汽機關は大阪から取寄せたのであるが、行違ひ等の爲め著しく工事の進捗を妨げた。其他水道、瓦斯等の附帶設備の工事も遲滯して一時は作業に大なる困難を伴つた。之等の工事に費したる經費は、建築費十三萬三千餘圓、設備費五萬九千餘圓に上つた。

三、器械器具類

藥品、材料を始め主なる器械、器具類は本會本部から配給を受けたのであるが、當時之が調達には至大の困難を伴ひ、隨て時日を遷延して、治療上不自由を感じたる事少からず、幸ひにして慶應大學病院の援助を得て辛うじて難關を突破したる情況であつた。

四、職員

本院の業務に從事したる職員の數及主要職員氏名は次に表示する如く

である。其大部分は慶應醫科大學病院から補充を仰ぎ、殊に醫長中には無給囑託多く、同病院とは密接に連繫して、業務遂行上至大の便宜を得て居る。

職員數調査表

職名	定數	職名	定數	職名	定數
病院長	一	看護婦	四七	合計	一二三
醫長	二	事務長	一		
有給	七	事務員	五		
醫長	二	看護婦監督	一		
無給		看護婦長	一		
醫員	二	主任看護婦	四		
調剤長	一	佛人	三〇		
調剤員	二				

主要職員氏名表

病院長醫博西野忠次郎
外科醫長醫博茂木藏之助
小兒科醫長醫博唐澤光德
眼科醫長醫博菅沼定男
耳鼻科醫長 弘中英信
內科醫長醫博草野宏次郎
整形外科醫長 木村博
產婦人科醫長醫博川添正道
皮膚科醫長醫博笹川正男
商科醫長 岡田滿

調剤長 稲生豊作
醫員 奥田喜久三
同 原政敏
同 大庭國紀
同 小坂慶文
同 鎭目專之助
同 堤寛一
同 雨宮保衛
同 秋山碻
同 石黒元治
同 村山輝邦
同 富取卯太郎
商科醫員 伊吹高峻
調剤員 上貞良昭
書記 森田ふい
看護婦長

事務長 戸田五郎彦
醫員 中西壽太
同 樋口隆藏
同 阿部貞治
同 中村復一郎
同 中鉢不二郎
同 福島四郎
同 佐藤勇
同 高木六郎
同 坂口武雄
同 河合一郎
調剤員 中西筆吉
書記 染谷庄次郎
看護婦監督 鈴置ケイ

五、作業及其成績

大正十二年十二月二十五日先づ慶應醫科大學病院內に於て外來患者の診療を開始し、爾來外來患者の取扱は便宜上同病院に於て、之を行ひ、收容患者は翌年一月二十一日から本院に於て之を取扱つた。

大正十三年六月末、本院を整理して經常の經營に移す迄に於て取扱つた患者の總數は

收容	八百九十七名
其延日數	二萬五千二百九十八日
外來新患者	六千四百七十二名
再診を併せて	三萬九千百八十六名

に達した。

六、整理

大正十三年六月末本院は臨時事業を終了し、七月一日から之を經常經營に移した。同時に施設を縮少し、入院定員を百十名に減じ、其内九十名を有償とした。但外來患者は全部無料にて取扱ふ事になつて居る。職員も之を減じ、院長以下醫員九名、其他之に準じて總員六十二名となつた。

第五章　臨時芝病院

本院は震災直後財團法人協調會が罹災傷病者救療の目的を以て、建設し、協調會臨時芝病院と稱し、十月一日から患者を取扱つて居つたものであつて同會の計畫では年末迄に撤廢する事になつて居つた。然るに折角設備を整へて患者を收容したものを、僅か二箇月餘で閉鎖しては患者の爲に不幸を來すのみならず、設備も亦惜しむに餘りある次第なるを以て、爾後本會で繼承することにし、十二月一日を期し、職員設備一切と共に患者を其儘讓り受け、病院の名稱を更めたものである。本病院の位置は芝公園六號地に在て、敷地は東京市電氣局共濟組合の借地を一時的に轉借使用したものである。總建坪八百四坪の「バラック」建築を施し、病室(三百二十二坪五合)の外、診察室三、手術室一、藥局一、醫員室事務室各一、待合室一、其他附屬室十餘室に分れて居る。協調會の投じた建築費は五萬九千七百十八圓(一坪七十四圓强)と云ふことである。之に更に設備費一萬七千五十

七圓を以て內部の設備を整へ、病床三百を有し、院長以下醫局員八名、藥局員六名、看護婦三十八名、事務員九名の職員があつた。

本會は之を現狀の儘十二月一日を以て繼承し、二箇月間の維持の後、大正十三年一月末日更に之を東京府醫師會に讓渡した。

其間本會に於て取扱つた患者は

收容患者　百九十五名

其延日數　一萬九百八日

外來新患者　二千百六十名

再來を加へて　八千八百九十五名

となつて居る。

救療に從事したる主要職員の氏名は次の如くである。

主要職員氏名表

院長兼外科主任醫　博前田友助　副院長兼內科主任　正木俊二

內科醫員　川島彌三郎　內科醫員　寺島長門

外科醫員　大槻正路　產婦人科主任　勝野邦雄

同　片柳常作　外科醫員　本郷光美

同　木脇畝夫　藥局長　松永幹一

事務長　木部一枝　同事務取扱　渡邊金太郎（本部辭任後）

看護婦長　遠藤みさを

第六章　臨時駿河臺產院

多くの罹災市民が、火災の跡に膝を容るゝばかりの假小屋を營んで、只管復興に全力を竭して居る時に當つては、獨り病人のみならず、姙產婦の如きも安んじて娩產を遂ぐるに足る場所にすら困惑する有樣であつて、產院の設立は眞に焦眉の急であつた。本會は斯道に於て多年の聲望を負へる濱田病院が罹災燒失して、院長小畑氏が其部下と共に腕を撫しつゝ本郷の邊に避難して居る趣を聞き、同氏を煩はし濱田病院の燒跡に產院を興して、救療を始めるならば、忽卒の際創業比較的容易にして、受療者にも亦便多かるべきを信じ、同氏の快諾を得て計畫を進め、九月十九日建築工事に着手し、十月十五日治療を開始する迄、殆ど一瀉千里に運んだのである。而して翌大正十三年三月三十一日之を閉鎖して、建物及設備の全部を濱田病院に拂下ぐる迄百七十日間、眞に緊張したる活動を續けた。

此間の情況は同院の報告に詳細を悉くして居るが、玆には其主要なる部分を左に摘錄することゝした。

一、產院開設準備

九月十八日駿河臺產院開設の議一決するや、前古未曾有の大事變に際し罹災救護の任に膺る院長の決心牢固として定まり職員の氣は躍り一刻の猶豫すべきにあらずと直に濱田病院燒跡約千坪の地に百五十床を容るべき六百坪に達する大「バラック」の建築設計並に之に伴ふ諸設備の規畫を立て數時間にして之が設計圖並に豫算案成り翌十九日より本部の手により建築工事に着手せり一方本郷西片町に於ける濱田病院避難所は忽ち臨時產院創立事務所と變じ震災に由て試練されたる職員は更に一致協力して專ら開設の準備に從ひ鋭氣益々振ふ然れども未だ震災の餘燼治らず交通機關の依るべきものなく混沌たる街衢を東奔西走して醫療器械器具は勿論火鉢藥鑵等の雜品に至る迄職員總出にて之が購入に努め或時は一物を求むるに十數丁の遠きに到り或時は醫員自ら荷車を挽き之か運搬に從ひ奮鬪力行斯くて炎天の下馴れざる勞役に服せる爲め或る若き一醫員の如き腦貧血を起し救護班の手に救はれたる事さへありて其苦心想像の外にあり斯くて日を經ること旬餘にして大體の計畫略ぼ緒に就き工事亦進捗したるを以て愈々十月十五日開院の豫定を以て一時鄕里に避難中の看護婦其他の職員に檄を發して之が召集を行ひ十月十日前後には豫定の職員悉く集まり陣容全く成る

二、姙婦調査

燒跡に於ける姙婦の狀態を知るは產院の經營上最も必要なる事項に屬するが故に之が調査を行ふことゝなり產婆看護婦を分ちて巡回班十組を作り醫員之を引率して十月十日より市內燒跡全般に亘り「バラック」居住者に就き姙婦の調査を行ふ此事たるや甚だ難事にして苟くも犧牲的精神なくして能くすへき業にあらず今調査成績を擧ぐれば左の如し

各區姙婦一覽表

區域	姙婦數	區域	姙婦數
麴町區	七七	神田區	二一二
本郷區	四六	日本橋區	一二三
小石川區	九二	京橋區	一九〇
芝區	一二八	本所區	二九七
下谷區	二六八	深川區	二八四
淺草區	五〇五	其他	二〇
合計	二、二四二		

三、位置及構造

本院は神田區駿河臺袋町十三番地濱田病院燒跡にありて約千坪の敷地を有し交通至便土地高燥閑靜にして最も恰適の位置を占む。

其構造は六百二十餘坪のバラック建にして本館、表、中、裏病棟の四棟と一棟の自動車車庫より成る。

本館は中央にありて正面に玄關あり其左右に診察室、豫診室、試驗室、患者控所、藥局事務室、應接室、幹部室、醫員室、職員食堂、看護婦長室、雜使婦室、湯呑所の各室列なり更に廊下を隔てゝ大分娩室、手術室兼小兒沐浴室、器械室洗濯室、浴室等を有す。

表病棟は本館の西南にありて第一乃至第五病室並に四個の別室、小分娩室、看護婦室、配膳室より成り第一乃至第五病室には各十四床宛のベットを備ふ。

中病棟は本館の北後方にありて第一乃至第三病室及看護婦室、配膳室よ

り成り更に廊下を隔てゝ看護婦食堂、機關室、炊事場等を有し病室は各十四床のベットを備ふ。

裏病棟は中病棟の後方にありて其構造全く中病棟と同一にして更に廊下を隔てゝ看護婦室、看護婦及附添看護婦寄宿舍相連る而して各病棟及本館の間は二條の廊下を以て連絡を計れり之を要するに分娩室は大小二室ありて大分娩室には十床の分娩用ベットを備へ多數の分娩を取扱ふに便し小分娩室には一二床のベットを置き特種の分娩用となす。

病室は大小十五室ありて四室の獨房を除き他の十一室は各十三乃至十四床宛を容るべき大病室にして合計百五十人餘を收容するに足る。

而して蒸汽機關の設備ありて各病室、分娩室、手術室、小兒沐浴室は勿論各室に蒸汽暖房を通し又浴室並に炊事にも蒸汽を用ひたり。

四、職員

本院の職員數及主要職員氏名左の如し。

職員定數表

職名	員數
院長	一
醫員	七
調劑員	一
書記	一
産婆長並看護婦長	一
附添看護婦	六〇
合計	一二一

職名	員數
副院長	二
調劑長	一
事務長	一
雇員	一
産婆並看護婦	二一
傭人	二二

主要職員氏名表

院長	醫學博士	小畑惟清	
副院長	松浦海三		
醫員	川口浩		
同	古川盛雄		
同	池田きみ		
調劑長	植田德市		
事務長	澁江利光		
書記	高橋直雄		
雇員	鎌田りウ		
副院長	醫學博士	林	敏郎
醫員	山田	康	
同	坂本常秋		
同	柳澤達次郎		
同	後藤秀子		
調劑員	菊池喜久		
書記	平石仲次郎		
雇員	伊勢長治郎		
産婆長並看護婦長	石川ユウ		

五、診療開始

産院建設の議起りてより約二旬にして建築の工成り諸般の設備亦整ひたるを以て十月十四日全部の引越を終り愈々十月十五日診療を開始す、當日院長以下職員早朝より出勤す出勤者一同の顔には清新の色漲り胸には奉公の念燃えて各其職務に勵む、而して開院第一日の診療患者は外來二十四名にして入院患者五名なり。

午後診療終るを待つて開院式を行ひ小畑院長起ちて一場の訓示を述ぶ其要旨は次の如し

前古未曾有の大震災により國家の前途を憂へしめた彼の華美輕薄の風潮は倏忽として消へ失せて勤勉自己犧牲の美風は油然として起つた、かくの如く敢へて今回の震災を樂觀的に觀察すと前提し九月一日生死の間を同じ運命の下に徨へる我濱田病院の一團は悲痛なる緊張の思出に滿ちて只今此處に集まる見渡す限り名殘を留めぬ燒野原である、我等はあの時の眞劍の尊き生死の境の氣分を忘れてはならぬ、抑も恩賜財團濟生會の今次の勤務は明かに　明治大帝の思召に基きて行はるゝ戰時勤務である、即ち今日の集合は戰時勤務に服する首途の集合である事を忘れてはならぬ。

六、診療方法並に患者に對する措置

臨時救濟事業として診療は最も簡易迅速を主とすべきは勿論極めて親切丁寧にして同情の念を以て患者に接するを要するが故に本院にては診察時間の如き此趣旨に基き特に毎日午前八時より午後四時迄と定め患者の便利を計り診療には院長指揮の下に兩副院長交替して其衝に當り醫員之を助け患者をして永く待たしめざる樣努めたり、而して往診又は入院の爲め自動車を備へ診療の圓滑を期せり。

而して入院患者ある時は看護婦長自ら起つて看護婦を指揮して病室に導き直に一定の病衣に着換へしめかくて病室の清潔と被服の統一を計

り出生兒には簡素なる乳兒服を備へて之に與へ産婦にも其情況を汲みて衣類を給與するの方針を取り救療の徹底を期せり、入院患者の取扱には各病室に四人乃至五人の附添看護婦を配置し看護婦之を督勵して凡て献身的精神を以て常に姙産婦の處置は勿論出生兒の沐浴大小便の始末並に襁褓の洗濯に至る迄親身も及ばざる注意と努力とを以てし更に此等看護婦は常に彼等を慰め隔意なきが故に看護婦と患者との關係圓滿にして些の不平不滿の聲を聞かず入院したるものは退院後謝意を表し來るもの尠からず。

又食事は直營制度に依り食料品の如き直接市場より購入して新鮮と清潔とを主とし供給せるが故に兩々相俟つて患者は大に感謝の意を表し一般施療院に於けるが如き惡聲を聞かざるは本院の誇として措かざる所なり。

又病室の取締並に患者の心得等は決して患者に威壓を感せしめざる樣極めて平易なる心得書樣のものを掲示することゝし形式を避けて實績を擧ぐることに努めたり、今姙産婦心得を掲ぐれば左の如し。

姙産婦の心得

一、感冒をひかぬ御用心
二、胃腸をこわすは母子に毒
三、餘計な事に氣をもむな
四、適度の運動するがよい
五、便通は毎日ある樣に
六、小用は必ずがまんすな
七、清物はさつぱり吸かく
八、帶の堅いは却て害
九、身體はきれいに垢ためず
十、お乳房はことさら氣を附けよ
十一、泣く兒に乳とは惡い僻時間正しくやるがよい
身體の具合の惡い時は何時でも遠慮なく申出なさい

恩賜財團 濟生會駿河臺臨時産院

七、皇后陛下の行啓

十一月十九日　皇后陛下には本産院に行啓あらせらる連日の陰雨名殘

りなく晴れて氣漸く澄めり産院正門には朝來國旗を掲げて今日の光榮を待つ　皇后陛下には自動車にて大森皇后宮太夫等の供奉員を隨へ午後三時四十分着御あらせられ御先着の總裁閑院宮殿下を始め德川、蜂須賀正副會長、小橋事務取扱、北理醫務主管其他の本部役員、內務省山田衞生局長、産院側小畑院長以下重なる職員の奉迎の裡に院內に設けの臨時御座所に入御小畑院長に拜謁を給はり院長より診療開始以來今日迄の診療狀況一班並に開院以前より引續き行ひたる各區燒跡バラック街に於ける姙婦調査成績及大震災の姙婦に及ぼせる影響觀察等各項約十分に亘り言上したるに　陛下には「色々お骨折に思ふ」旨の優渥なる御言葉を給はり之より院長の御先導にて外來診察室より中病棟、裏病棟等幾多收容中の姙産婦を御慰問あらせられ中病棟一號室に收容中の双兒の上に御目を止められ其可憐なる樣に御機嫌麗はしく御會釋あり次で産婆、看護婦寄宿舍、分娩室、小兒沐浴室等順次玉歩を移され小兒沐浴室にては多數嬰兒の沐浴の有樣を御覽あり又體重を計る樣や着衣の狀況等に就き一々仔細に御下問あり御感興殊の外深く拜せられたり、之より更に表病棟に渡らせられ茲に收容され居る子宮癌剔出患者並に帝王切開術により娩出せられたる母子の經過に就ても御下問あり其何れも無事なるを聞召され極めて御滿足の體にて難有御言葉をさへ給はりたり、斯くて目下收容中の百四十餘名の姙産婦を親しく御慰問あらせられたるが何れも御仁慈の渥きに感激せざるものなく中には感極りて歔欷するものさへ見受けたり、尙ほ最も冥加なるは恰も本日入院せる本所區相生町五丁目二十二番地のバラックに住める經師屋由太郎氏妻今村きよと云へる産婦にして　陛下御着輦と同時に産氣付即座に安す〳〵女兒を出産したるが其事偶々御聞に達し大森皇后宮太夫名付親となり「幸子」と名けられたり世にかゝる果報者はなかるべしと附添の看護婦等は稀有の光榮を喜び合へり、斯くて　陛下には御少憩の後還啓仰出され諸員奉送の裡に御機嫌麗はしく午後四時三十分御還啓あらせられたり。

因に此日小畑院長より捧呈したる書類は本院診療狀況一班並に姙婦調

査成績等なりき。

八、御下賜品傳達式

皇后陛下には曩に本院に行啓親しく患者を慰問せられたるは本院の光榮たるのみならず患者の感激措く能はざる所なるが至仁至慈なる　陛下には嚴寒の折柄更に罹災患者の寒苦を思召され本院患者百五十名、乳兒九十二名に對し衣類御下賜の御沙汰あり本院にては十二月二十五日之が傳達式を擧げ院長より　陛下の渥き思召を傳へ各自一日も早く健康體に復し業務に勵み報効の誠を盡さねばならぬとの旨を述べて御下賜品を夫々患者に配付したるに何れも首を垂れて感泣せざるものなかりき。

九、診療成績

大正十二年十月十五日診療開始より大正十三年三月三十一日産院閉鎖に至る迄約六ヶ月即ち百六十九日間に於ける患者數は

外來患者

新患	二千四百四十四人	内罹災者二千百十八人
再診以上	三千四十五人	
計	五千四百八十九人	

にして此一日平均三十二人五弱となり。

入院患者

實人員	千百五十四人	内罹災者千六人
延人員	二萬千百四十四人	

にして此一日平均實人員に於て六、八人延人員に於て百二十五人强となる、而して罹災者は外來に於て八割七分弱入院に於て八割七分强となれり。

尚分娩兒數九百三十人にして一日平均五人五の出生兒を出したる計算となる。

以下各月に於ける入院、外來及分娩内譯表並に診療成績病類別、年齡別、職業別を左に掲げ一覽に供せん。

自大正十二年十月十五日診療開始 至大正十三年三月三十一日産院閉鎖 診療患者月別表（△印ハ罹災者）（其一）

	收容患者 入院	退院	月末現在	外來往診 新患	再診以上	計
大正十二年十月	一〇四人	二三人	八一人	五六九人	一〇〇人	六六九人
十一月	二一一	一五五	七八	五四七	四六三	一〇一〇
十二月	二〇一	二二一	一一七	四七〇	三八四	八五四
大正十三年一月	二三八	一九七	一〇三	三二九	六〇三	八八七
二月	二〇七	二二二	一一一	二七四	五三九	九六六
三月	一七四	一八九	一四三	三四五	六二一	七八五
計	一、一五四	一、二二七	九九八	二、四四四	三、〇四五	五、四八九
自大正十二年十月 至大正十三年三月 診療成績（△印ハ罹災者）（其一）	△	△	△	△	△	△
大正十二年十月	△	△	△	△	△	△
十一月	△	△	△	△	△	一〇、九
十二月	△	△	△	△	△	八八
大正十三年一月	△	△	△	△	△	一〇、七
二月	△	△	△	△	△	七六
三月	△	△	△	△	△	八二
計	△	△	△	△	△	四六五

同上（其二）分娩兒數月別

	男	女	計	佛考
大正十二年十月	二二人	三六人	五八人	双胎 男
十一月	七七	七四	一五一	女
十二月	八四	八八	一七二	
大正十三年一月	一〇五	一〇九	二一四	双胎 男女
二月	九五	七六	一七一	同 女
三月	八二	八二	一六四	同 女
計	四六五	四六五	九三〇	四

自大正十二年十月 至大正十三年三月 診療成績（△印ハ罹災者）（其一）

患者 性別	外來 男	外來 女	外來 計	轉歸 全治 男	轉歸 全治 女	轉歸 全治 計	轉歸 輕快 男	轉歸 輕快 女	轉歸 輕快 計	轉歸 收容 男	轉歸 收容 女	轉歸 收容 計	轉歸 共他 男	轉歸 共他 女	轉歸 共他 計	現在患者 男	現在患者 女	現在患者 計	治療日數 男	治療日數 女	治療日數 計
	一四人	二、四三〇	二、一一八	二人	二五六	二、二五八	一一	一、一五六	一、一五四	一人	一、一〇六	一、〇〇六	一一	一九	二〇三	—	—	—	三三日	二六	八、九〇一
	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
	一一	一、〇七	二、四四四	二三五	二三五	二五八	一一	一、一五六	一、一五四	一一	一、〇〇六	一、一五四	一九	一九四	二三四	一一	六二二	七四一	一〇、三	八、八七五	一〇、三五九
	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△

性別	收容	全治	輕快	死亡	其他	現在	治療日數
男	一人	一人	一人	一日	一人	一人	一人
女	一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人
計	一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人

至自大正十二年十月
大正十三年三月
患者病類別（△印は罹災者）

病類	外來	收容
傳染病患者	二人	一人
消化器疾患	七八	二
呼吸器疾患	六八	二
泌尿器疾患	七九	三
婦人科疾患	三四 三〇 八一	一 八一 九六
神經系疾患	四六	一
皮膚科疾患	一一	一
血行器疾患	三三	一
斑紋疾患	一一 七九 一六 七七	一 九〇 一三 一二
外傷疾患	五七	一
其他疾患	二三 七一	一
計	二二 一四 一四 八四	一 一 〇一 〇五 六四

至自大正十二年十月
大正十三年三月
患者職業別

職業	外來	收容
鑛業	一人	一人
鐵業	一	一
鹽業	二	一
金屬工業	九八	四
機械器具製造業	二四	一七

職業	外來	收容
化學工業		
繊維工業		
紙工業		
皮革、骨、角、甲羽毛製造業		
木、竹類ニ關スル製造業		
飲食料品嗜好品製造業		
被服身ノ廻リ品製造業	二、四四四	一、一五四
土木建築業	一五二	五九
製版、印刷、製本業	五九三	二九〇
學藝、娯樂、裝飾品製造業	一九一	八六
其他ノ工業	八三	五四
物品販賣業	一	—
旅宿、飲食店、浴場業	五五六	二五二
其他ノ商業	一二五	六三
通信業	四六	二七
運輸業	四八	七
公務自由業	二四	一四
其ノ他ノ有業者	四二	四二
無職業	二三	一七
計	二二三	一一一
	八八	四二
	三七	一一
	三二	一九
	二	三
	三	三
	四	二
	五	三

患者年齡別

自大正十二年十月至大正十三年三月

年齡	外來	收容
十歲未滿		
十歲以上—十五歲未滿		
十五歲以上—二十歲未滿		
二十歲以上—三十歲未滿		
三十歲以上—四十歲未滿	一、三四九	六四四
四十歲以上—五十歲未滿	九〇	四八
五十歲以上—六十歲未滿	七八九	三六九
六十歲以上	一七九	八四
	二八	六
	六	三
	二、四四四	一、一五四
計	三人	人

外來患者居住區別表

區	大正十二年十月	十一月	十二月	大正十三年一月	二月	三月	計
麴町區	二五人	九人	七人	五人	八人	四人	五八人
神田區	一二九	二〇	八	七〇	七四	七六	五五七
日本橋區	一七	二六	二〇	一三	一六	一一	一〇三
京橋區	一五	三一	一七	一二	一一	一三	九九

收容患者居住區別表

區	大正十二年十月	十一月	十二月	大正十三年一月	二月	三月	計
麹町區	一八	四一	五四	五五	五〇	四四	二六二
神田區	三人	五人	一人	七人	五人	四人	二五人
芝區	九	一五	一八	一八	八	一三	六一
麻布區		四	一一	一一	一	一	一四
赤坂區	二	六	六	二	一	二	一四
四谷區	四	一	一	一	一	一	一
牛込區	八	一一	九	一	一	一	一
小石川區	四〇	一五	一一	一五	一七	一一	一一
本郷區	四五	三二	一四	一八	一一	一二	一一
下谷區	五二	三八	一三	二	一四	一三	一二
浅草區	四七	九一	三一	三〇	四一	四一	二七
本所區	四七	六〇	三六	三九	三二	四六	二七
深川區	四四	三八	二〇	三二	二六	二〇	一七
市外	八五	五〇	四六	五四	四八	二五	三三
計	五六九	五四七	三二九	三二八	二一六	三二六	二、四四四

區	大正十二年十月	十一月	十二月	大正十三年一月	二月	三月	計
日本橋區	六	七	一二	一五	一一	九	六〇
京橋區	六	一二	一一	六	一〇	四	四九
芝區	一	七	六	一	五	七	二七
麻布區	一	一	二	一	一	一	三
赤坂區	一	三	一	二	一	一	一四
四谷區	一	一	一	四	一	一	四
牛込區	一	八	一	一	一	九	四四
小石川區	三	七	八	一二	五	一三	七三
本郷區	二	一四	一一	一八	一三	一二	七五
下谷區	一〇	一四	一八	二九	一三	二七	一四九
浅草區	一八	二七	二五	二六	二三	一三	一二二
本所區	一四	一五	二三	二六	一三	一一	八三
深川區	九	二二	六	二二	一一	二〇	一五八
市外	一三	二八	二二	三八	三七	二〇	一、一五四
計	一〇四	二一一	二〇一	二三八	二二六	一七四	

一〇、産院閉鎖

三月十五日本部よりの通知により愈々三月三十一日を以て産院閉鎖の事に決定するや患者の處置、諸種の整理に全員を擧げて從ひ諸事意の如

く進捗して無事救療事業の完結を告げ解散の日を待つ。

三月三十日本部より二條理事長、宮島參事、紀本救療部長、兼重會計部長來院職員を一堂に會し二條理事長及宮島參事より閉鎖に關する挨拶あり、小畑院長之に答ふる所ありて式を閉ぢ翌三十一日を以て職員全部の解散を行ふ。

大正十二年十月十五日診療開始より今日に至る迄約半歳小畑院長の統率其宜しきを得職員亦一致和協して所期の目的を達成したる事を衷心喜ぶものなり。

第七章　臨時三河島産院

第一節　施設

東京市外三河島町附近は細民の密集地として有名なる土地である。震災時此邊は火災を免れたるため、市内の燒失地から、本町を中心として尾久、日暮里、千住及下谷に連りて罹災細民の避難し來たる者多く、社會的に益々注意を要する處となつた。本會は同町一般の希望と、東京市内外全般の形勢とに鑑み、茲に臨時産院を設ける事に決し、同町長松本理三郎氏の提供したる土地に、建坪四百二十三坪のバラック建築に着手し、蒸汽機關も据付け、病床百箇と共に諸般の設備も概して臨時駿河臺産院に準じて之を整へ、十二月二十日に至りて漸く患者を取扱ふに至つた。

本院の職員は院長、副院長各一、專屬醫員四、兼勤醫員二、藥局員三、事務員三、婦長以下産婆看護婦三八、守衛三、小使二、雜使婦二、厨夫四、火夫二の合計六

十五名であつて主なる職員の氏名は次の通りであつた。

主要職員氏名表

院長	櫻井功	副院長	佐野綱次郎
醫員	相馬卯之吉	醫員	横關七子
同	伊藤陽助	同	久野産丸
調劑長	政本六郎	調劑員	橋本正雄
事務長	下重仙吉	書記	並木覺次郎
書記	後藤忠治	看護婦長	林鶴

第二節　作業及其成績

本院は産科の外、婦人科の診療を取扱つた事は駿河臺産院と同樣である。開院以來同地方一般から多大の感謝を受け、翌年六月末臨時事業終結と共に閉鎖したのであるが、其後は同町一般の希望により、地方官憲を通じて願出でたる同町峽田醫會の社會的經營を諒とし、之に設備一切を無償貸與する事になつた。

此間に取扱つた患者の狀況は次の諸統計の示す通りである。

自大正十二年十二月二十日至大正十三年六月二十五日　患者一覽表　臨時三河島産院調査

區分	月別	外來 新患	外來 再診以上	外來 計	入院	退院 全治	退院 事故	退院 死亡	在院 延人員	分娩 健兒	分娩 死産	乳兒死亡	乳兒在院延人員	手術 大	手術 小
	十二年二月	四五	四六	九二	二	一			一〇	二	七	一	一、四五		
	十三年一月	一七〇	四九七	六六七	四〇	二五	一		二、三二	四〇	五	二	二、〇三	六	一
	二月	二、八三	一、〇一五	一、二九八	九九	四五	三	三	一、八三	六二	一〇	五	四六六	一六	一五
	三月	三五一	一、五一一	一、八六二	二七	九二	六	五	二、一〇九七	二八	四	一	三、三七七	二	二
	四月	二四四	一、五三三	一、七七七	八〇	九〇	五	三	二、九三五	三三	三	二	二、〇〇二	二	一〇
	五月	三〇九	一、八〇〇	二、一八九	六九	六九	四	二	一、九三五	三〇	四	三	三〇二	一〇	一〇
	六月	一八六	一、二八一	一、四六七	一九	五六	一七	一	一、一二三	男一六 女一〇	男一七 女一六	一	一六五	三	七
	計	一、五八八	七、七五三	九、三四一	四二六	三七七	三六	三	八、九九八	男一〇八 女一〇四	男一七 女一六	三	一、七四六	五六	五七

備考　大正十二年十二月及同十三年一月に於ける治療患者の數が同年二月以降の患者數に比して著しく少數なるは主として院内の設備未だ完成せざりしと産院の開設未だ一般に充分知悉せられざりしに由る。

入院患者居住區別表　臨時三河島産院調査

三河島	尾久	日暮里	千住	市内	其他	合計
二〇八	三五	四二	四一	七三	二七	四二六名